

早稲田大学審査学位論文  
博士（スポーツ科学）  
概要書

沖縄空手の創造と展開  
－呼称の変遷を手がかりにして－

Creating and developing Okinawa Karate  
－ The significance of transitions in the term “karate” －

2017年 7月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科  
嘉手苅 徹

K A D E K A R U, T o r u

研究指導教員： 寒川 恒夫 教授



本研究では、古琉球から近代沖縄において、沖縄空手がどのように創造され、展開されてきたのかを呼称の変遷を手がかりとして考察を行った。呼称が沖縄空手の創造と展開を明らかにする上で重要な手がかりとなるのは、呼称の変遷が沖縄空手の創造と展開を象徴的に表しているからである。また、本研究では、琉球・沖縄で様々に使用されてきた呼称を、今日とかつての武術・武道としての空手道の総称を表現する種目名として「沖縄空手」という呼称を使用している。

琉球独特の徒手武芸は、近世琉球以降に型を媒介に継承されてきた武芸である。琉球の那覇士族が首里王府の布達を受けて実践してきた示現流ややわらとともに嗜んだからむとうの史料がそのことをよく示している。本研究で、からむとうは、琉球人が名づけた自称の呼称と解している。

からむとうが中国拳法が琉球化して琉球の武芸となったことを裏づけていると仮説を立てたのは、那覇士族が示現流とやわらとともに武芸として嗜んでいたことにある。首里王府の性格を反映して、実用的な武術として臨んでいたのではなく、「文人」としての第一義を保ちつつ、王府の奉公人としての心構えや護身術を目的として稽古を行っていたからである。

近世琉球の徒手武芸の史料を明らかにする史料は少ない。からむとうが著された「阿嘉直識遺言書」(1778年)は、島津侵攻後に、首里王府から布達された『羽地仕置』(1667年)、中国拳法が披露されたことを示す『大島筆記』(1763年)、薩摩藩士が名づけた瓦を割る琉球士族の手ツクミノ術が記された『薩遊紀行』(1801年)、拳を鍛える男の絵図が描かれた『南島雑話』(1855年)に「拳法術・トツクロウ」等が、これまでの沖縄空手の歴史研究では、個別に考察されてきたと考えられる。本研究では、これらの史料を関連づけて検証することによって、琉球の徒手武芸の存在と諸相を垣間見ることができたのではないかと考えている。19世紀半ば頃までの史料には、冊封使の使録や英国の軍人や外交官が書いた記録等があり、琉球の徒手武芸の存在をうかがい知ることができる。

19世紀半ば以降の琉球の徒手武芸は、唐手という、琉球の自称の呼称が生み出され、近代沖縄には一般化されていった。近世琉球から近代沖縄の時代は、沖縄にとって大きな世代わりとなるが、琉球の徒手武芸は、このような日本の一地方とは異なる琉球・沖縄の歴史や風土に育まれて、独自の武芸文化として花開いた。

近世琉球の徒手武芸、唐手の特徴を見ると、3つの側面の重なりを持つことが分かった。1つ目は武術としての殺傷性を持つこと、2つ目は教養としての武芸、3つ目は芸能としての役割で、それらが重なり合った全体像を持っていたと考えられる。

1879年の琉球処分によって、琉球国は消滅した。明治政府の強権的な軍事力を背景に「廃藩置県」が実施され、近代日本の一地方になった沖縄県は、旧士族を中心とした「琉球復国運動」が盛んに行われた。中国由来の唐手は、複雑な問題を孕んだまま

継承されていった。その様子は地元の新聞や教育関係誌に記事として残されていることからうかがわれるのは、疎まれる唐手、地域に継承される唐手、学校行事で披露される唐手として、その社会的評価は揺れ動いていた。

唐手が再評価されるのは、学校教育への導入であった。公教育の教材として取り入れられたことは、人々に広く認知され、沖縄で急速に県内全域に普及される契機となった。さらに、世相を反映して、同化教育、軍国主義教育に取り込まれていった。同時に、本土へ普及していくことにもなった。

本土へ普及した唐手は、学校教育に行政主導で普及し近代化が行われた沖縄と異なり、大学空手部を足がかりに一層近代化が促進されていった。唐手は、沖縄と本土で複線的発展を遂げていったが、いずれも日本の武道としての確立を目指して取り組まれていった。また、流派の創設によって統一的な組織が結成され、武士道由来の日本の武道として歴史が見直されていった。

このことが象徴されているのが空手道の呼称と型名の改称であった。呼称の変遷は、表記、呼び名、「空」の定義や自称か他称かという複合した条件から名づけられていったのである。本研究では、空手発祥の地としての沖縄の文化的アイデンティティを示しながら、本土で展開された日本の武道としての空手道を志向し、理念の構築や近代化の方向に対して複線的発展から同一のルール上に統一されつつあったことを明らかにした。

近代の終焉となったアジア・太平洋戦争では、沖縄は地上戦となる戦禍に見舞われた。多くの一般住民も巻き添えになって約20万人が沖縄戦で没した。地上戦となった時に、大手新聞社や大本営陸軍部の刊行した『国民抗戦必携』に再び「唐手」の呼称が用いられた。「唐手」の呼称には、武術的実用性が強く込められて使用された。

沖縄戦の犠牲者の中には、沖縄空手の先達も多数含まれ、戦後、沖縄空手の普及活動は停滞することになった。さらに、沖縄は日本から切り離され、27年間に及ぶ米軍統治下に置かれ、沖縄空手の動向も日本本土とは異なる経過を辿ることになった。沖縄空手にとってこのような経緯は、多くの課題の解明が進まないまま、戦前期に論じられてきた言説や論文が今日でもそのまま引用されている状況にあるのが実状である。

今後の課題として、沖縄学の伊波普猷、東恩納寛惇、真境名安興、仲原善忠等の空手史に関連する論文をその当時の時代的背景を鑑みて、再検証する必要がある。また、戦前期の空手家や関係者等に伝わる口承や論文を近年復刻された単行本、新聞、教育関係誌等とさらに詳細に比較・分析することによって、史実を明らかにする作業が挙げられる。その際に、沖縄空手の研究は、近世琉球の唐手を基盤として創造されてきたことから、沖縄独特の歴史と風土に育まれた沖縄空手の創造と展開を踏まえつつ、複線的発展を遂げて来た観点から考察する必要がある。